

乳幼児期の育ちと保育を考える

# 幼児の 教育

8

2008



好評発売中!

フレーベル館創立100周年記念出版

# 倉橋惣三文庫 <全10巻>

倉橋に学び、保育を極める。

日本保育界の父と呼ばれ、現代保育に影響を及ぼし続ける倉橋惣三の主要著作、倉橋に関する評論・エッセイを集めた全10巻。

## 倉橋惣三文庫①

### 幼稚園真諦

倉橋惣三/著 柴崎正行/解説



誘導保育など倉橋の理論・思想が展開される倉橋理解の基本書。倉橋研究を主導する一人・柴崎正行（大妻女子大学教授）の書き下ろし解説を付す。

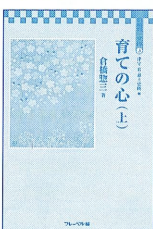
108-01

18×12cm 148頁 定価1,155円(税込)

## 倉橋惣三文庫③

### 育ての心(上)

倉橋惣三/著



倉橋保育の真髄が見える、小論や随筆を集めた『育ての心』の前半部分を収載。

108-03

18×12cm 180頁 定価1,155円(税込)

## 倉橋惣三文庫②

### 子供讃歌

倉橋惣三/著 森上史朗/解説



倉橋の保育を倉橋自身が語る、青年期から晩年までの自伝。倉橋研究の第一人者・森上史朗（子どもと保育総合研究所代表）の書き下ろし解説を付す。

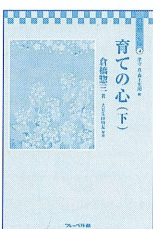
108-02

18×12cm 236頁 定価1,260円(税込)

## 倉橋惣三文庫④

### 育ての心(下)

倉橋惣三/著 大豆生田啓友/解説



『育ての心』の後半部分。新進気鋭の倉橋研究者・大豆生田啓友（関東学院大学准教授）の書き下ろし解説を付す。

108-04

18×12cm 244頁 定価1,260円(税込)

続刊予定

- ⑤幼稚園雑草(上)
- ⑥幼稚園雑草(下)
- ⑦子どもに生きた人・倉橋惣三(上)
- ⑧子どもに生きた人・倉橋惣三(下)
- ⑨倉橋惣三・その人と思想
- ⑩倉橋惣三と現代保育(仮題)

キンダーブックの

# フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

# 幼児の教育

第107巻 第8号



乳幼児期の育ちと保育を考える

# 幼児の教育

第107巻 第8号

もくじ

巻頭言

子どものトラブルと保育者

友定啓子

特集 緑蔭図書紹介

梨木香歩『ぐるりのこと』

内藤知美

子どもの心をとらえる絵本

久保小枝子

大正・昭和の絵雑誌

式 淳子

お父さんだからこそその絵本

田中尚人

青いことはそう悪くない。

菊地知子・鈴木実乃里

ある日



発達心理学者の子育て奮戦記(4)

長田瑞恵

小さな反逆児

上海⇄東京 子育てメール便(4)

橋本雅子・津守多実

吉岐島便り(2)

田内英理子

命のつながり

子どもと保育の情景(20)

戸田雅美

みんなで遊ぶと楽しいね

保育の現場から

和島千佳子

カマキリとの出会い

お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(20)

「女性研究者支援」と

「大学内にある保育の場」についての覚書

塩崎美穂・湯浅周子



## 子どもとトラブルと保育者

友定啓子

二〇〇八年三月、幼稚園教育要領が改訂され、二〇〇九年の春には新しい教育要領の下での保育が実施されることとなります。この夏休みは全国のあちこちで、これからの十年を視野に入れて、保育を見直す作業が始まっていることでしょう。新しい教育要領は、これまでの幼稚園教育の基本の上に立って、「幼児が人とのかわりを深めること」を重視していることが特徴の一つです。

人とのかわりはいつの時代でも課題であり、また人間の一生の課題であり、それまでのその人の体験の全てが込められたものです。第三者が、こうすればこういう力が付くと簡単に言えるようなものではありません。ただ言えることは、周囲の人と自分に対して愛情や信頼感をもてるかどうかですが、その人がつくる人間関係の根底に横たわっていて、それがとても弱い場合には、生きていく上で不安定感を抱えることになりそうだということです。そして現実にはこの最低ラインさえ与えられず、人生のスタートのところから大きなハンディを背負ってしまう子



どもが少なからずいます。

人は経験を重ねるほどに、他者不信や自己不信に陥る機会も増え、幼児のように無条件に人を信頼することができなくなります。人を求める気持ちとは裏腹に、人と自分は違うのだと言い聞かせなければならぬこともよく起ります。

人とのかわりはいつでもトラブル絡みです。それぞれ違う人格なので当たり前なのですが、他者否定でもあり自己否定でもあり、本人にとってはつらいことで、トラブルへの対処や立ち直りが建設的にできるかどうかは、人とのかわりの大きな別れ道だと思います。

そんなことを考えながら、今私は数人の仲間と「幼児同士のトラブルに保育者はどうにかかわっているか」という研究に取り組んでいます。たいして目新しいテーマでもないのですが、保育記録の収集や保育者へのインタビューを通じて、いろいろな言葉に出会いました。その中で、キーワードではないかと思っただけの言葉が幾つかあります。「トラブル場面はトラブルではない」「トラブルは成長を見る場面」などです。トラブルは当の子どもにとっては困った場面ですが、保育者にとってはちっとも困ったことではなく、「子どもが育つ場面」そして時には「うれしい場面」にもなるようです。保育者はそれまでの成長を見続けてきているので、トラブルの様子や対処の仕方にその子の成長をすぐに見てとることができます。

いつもは相手に殴りかかっていく子どもが、今日はそれをやらないうで一生懸命言葉で訴えていることに気づいたとき、トラブルには違いないけれど、保育者にとってはそれだけでもうれしい姿です。「たたかないで口で言ったらわかるよ」と伝え続けてきたことが、あの子の心とからだで育まれたのだとわかるからです。トラブルのように自己感情にかかわるものは、人に教えられたからといって知識のようにするりとは吸収できなくて、行動に表れてくるまでには、時間がかかります。保育者はトラブルの場面で、子どもの自己回復を助けたり、双方の気持ちをつないだり、解決策を一緒に考えたり、ものの考え方を教えたりしますが、それがその子にどう取り込まれたかはそのときにはわかりません。それは、それこそ次のトラブルのときにわかるのです。あるいはトラブルが起らないということでわかることもあるでしょう。

『ごめんね』『いいよ』で終わるんじゃなくて……』という言葉も、繰り返し聞きました。トラブルを善悪だけで表面的におさめてしまうことへの戒めではないかと解釈しています。トラブルは痛い思いやつらい思いをしながら人と人が本音で出会い、それぞれが折り合いをつけ、相手と自分を理解し信頼を回復する過程です。そして、トラブルの解決以上に、それに至る過程で相手を理解したり自分が理解されたりして、相手とつながることが大事なのだと思います。関係を回復できたといううれしい経験、関係は回復できるという経験として残ってほしいと





思います。自分が失敗しても許してもらえ、逆に相手の失敗を許してやれるという深いかわりが、自分と相手を支えるのではないのでしょうか。

子どもたちが「あの子はきらいだ」「もう二度と遊ばない」という関係にならないように、行き過ぎた自分にも気づくように、保育者たちは心を砕いてトラブルにかかわっています。そういう体験の繰り返し、幼児が人と自分を信頼することにつながっていくのだと思います。

そして五歳児になると、それまでのトラブル体験の積み重ねを背景に、子ども自身が、トラブル回避・解消・解決に向かおうとする姿に結実していくのだと思います。そこには、人と受け入れ合う関係を持続させていきたいという子どもの意思を見ることができません。こういう持続的な関係をつくりながら、協同する経験も重ねていくのではないのでしょうか。人とのかわりを十分に体験できる保育の場で、立ち直りを支えてくれる保育者とともにある保育の日々は、何度でもやり直しのさく練習の日々でもあり、人とかかわる本番そのものであると思います。

(山口大学 教育学部)

#### 参考文献

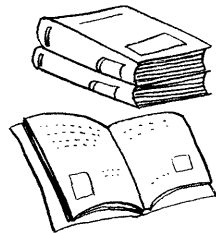
友定啓子他『「ごめんね」の向こうに―幼児同士のトラブルに保育者はどうかかわっているか 保育事例集―』二〇〇八年

特集

緑蔭図書紹介

## 梨木香歩『Lovers Only』

内藤 知美



梨木香歩の作品に初めて出会ったのは、『西の魔女が死んだ』でした。児童文学作品といえるこの本から、日常の生活の中ではくくまれるファンタジーの世界を感じました。そして、この作品には日本的

な風土やそこに生きる家族を描きながらも、どこか西欧的な人間観が感じられ、両文化の交錯が魅力であると思いました。その後は『裏庭』『からくりからくさ』『りかさん』『エンジェルエンジェルエンジェル』と梨木作品を読み進め、彼女の選ぶ繊細な

言葉と言葉の裏にある物事に対するていねいな観察力に魅かれ、頁をめくる手は加速度を増していったように思います。

今回、緑蔭図書に取り上げるのは、『ぐるりのこと』（新潮文庫 二〇〇七）です。もともとは季刊誌『考える人』での連載であり、初の随筆集『春になったら苺を摘みに』に続く作品です。物語作品の中に見え隠れしていた彼女のテーマが、自身の言葉でストレートに語られていて、彼女の人間観に触

れつつ深く引き込まれていきました。

『ぐるりのこと』という本のタイトルは、彼女が敬愛する菌糸類研究者が、子どもたちに向けて「自分のぐるりのことにもっと目を向けてほしい」と言った言葉から名づけられました。人間の感覚をはるかに超えるスピードで、全ての現象が皮膚の上をつるりと滑っていくような希薄な世界へと巻き込まれ変容していく時代のうねりの前に、圧倒的な無力感に打ちのめされ、揺らぎを感じていた梨木は、その揺らぎを受け止めつつ、「自分の今いる場所からこの足で歩いて行く、一步一步確かめながら、そういう自分のぐるりのことを書こう、と、私はこの連載のタイトルをきめた」と述べています。

自分の今いる場所を基点とした「ぐるりのこと」は、実は壮大な領域でもあります。ぐるりの世界を書くとすることは、人と関わるすべての問題に「自ら関わる」ことを宣言するという意味でもあるので

す。梨木は、関わって生きることを決意し、言葉を通して世界を表現していこうとしているのです。

つづったテーマは、「境界」「向こう側とこちら側、そしてどちらでもない場所」「共感する行為」「群れる行為」など、人が生きるうえで欲求しつつ、拒否しつつ、しかし巻き込まれざるを得ない「関係性」の問題です。もちろんそれは政治の問題を多分に含んでいます。

歴史の中で繰り返されるさまざまな問題に対して、「共感する」というのは大事なことだ。が、それはあくまで『自分』の域を出ない。自分の側に相手の体験を受けとめられる経験の蓄積があり、なおかつそれが揺り動かされるだけの強い情動が生じなければ働かない」と述べ、「私たちの経験してこなかった相手の歴史に対して、そしてもしかしたらそれが自分のものとなっていたかもしれない可能性に対して、自分を開いていく……つまり、他者の視点

を、皮膚一枚下の自分のうちに同時進行形で起きている世界として、客観的に捉えてゆく感覚を、意識的なわざとして自分のものにする」ことはできないかと問い続けます。

観念的ではなく、プラクティカルなものとして、思考ではなく、体感されるものとしても描きだしていきたいと彼女は言います。そしてその強い意志は、「ぐるりのこと」を描く「わざ」にも現れています。自分と関わる世界を描き出すために、時間や場所を超越・往来し、読者の思考を開きながら、貪欲に試行錯誤を繰り返し、世界を描く方法を模索しています。

本とともに「ぐるりのこと」への思考を進めるうちに、彼女が描く「共感」という言葉の背後にある力関係、群れることの安堵感と欺瞞性、多様で複雑な問題をクリアにしたいという欲求への理解とその性急さへの警鐘など、「子ども」という他者と共感

し、個として尊重し、共に歩んでいこうとする保育関係者にとっても、共通でかつ核心のテーマや問題が浮かび上がってくることに気づかれます。そして保育研究が、子どもを理解するという名目の下に、子ども不在の性急な結論を導き出すとすることへの危惧も、著作の内容と重なってきます。

梨木は、「もっと深く、ひたひたと考えたい。生きていて出会う、さまざまなことを、一つ一つについて味わいたい。味わいながら、考えの蔓を伸ばしてゆきたい。例えば、共感する、ことが、言葉に拠らない多様性に開かれてゆく方法について。」と、「ひたひたと考える」ことを希求しています。

また「肌身が経験する、圧倒的なりアリティの中に参加している、という感覚は未だかつて語られたことのない言葉を使いたいと強く欲求させる」と述べ、常に新しくあり続ける世界を描く方法を生み出すことを切望しています。

生活の中の積み重ねの中で感じられる「確からしさ」、決して確実なものではないが、そこに感じ取れる「確からしさ」の気配をとらえていくこと、すなわち体感を起点として世界をとらえようとするその方法は、子どもと共にある人にとっても不可欠な感覚であり、子ども理解の基本であるように思います。

広島で焼かれてしまった折鶴を折りながら『切れる』若者がいるのなら、しょうがないな、と、社会のどこかが『繋いで』ゆけばいい」という、生きることへのひたむきで強い作者の意志に心を動かされ、子どもを取り巻く環境の変化や時代のうねりの性急さに打ちのめされながらも、もう一度原点に戻って「子どもと一緒にいる営み」をていねいに味わいたいという思いを励まし支えてくれる作品でした。

そして、それ以上に魅かれたものは、ぐるりの世界を描き出す方法へのあくなき探究心です。彼女が

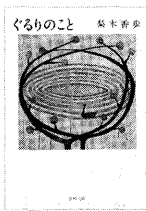
選んだ方法は「物語化」であり、自身を取り囲む多層な世界に住まう、地霊・言霊の力とおぼしきものを総動員して、一筋の明晰性を辿りゆこうとしています。「自分の内側にしつかりと根を張ること。中心から境界へ。境界から中心へ。ぐるりからくみ上げた世界の分子を、中心でゆつくりと滋養に加工していく」物語を語る営みは、語る方法への不断の模索と両輪なのです。

本を閉じて、一息つきゆつくり周りを見回しながら、子どもと共に生きることの営みを、どのような方法で語っていくのか、問い続けていきたいと思いました。

(武蔵工業大学 准教授 保育学・児童文化学)

ぐるりのこと

梨木香歩著 新潮社





## 子どもの心をとりこめる絵本

久保小枝子

私は「保育者として子どもたちと共に過ごす時間の中で最も好きな時間は」と尋ねられれば、迷わず「子どもたちと絵本を読む時間」と答えます。生活のさまざまな場面や、成長していく発達の段階に応じて、子どもたちは心をひきつけ夢中になる絵本に出会っていきます。

今回は、一昨年度、昨年度と担任をした四歳児年中組、五歳児年長組の子どもたちの様子から、私が最も印象に残った二冊の絵本をご紹介しますいただきます。

きかんしゃやえもん

阿川弘之文 岡部冬彦絵

岩波書店



Y男は三歳児年少組だったとき、自分のイメージで遊びを展開させながら夢中で遊んでいました。しかし、友達が一緒に遊びたいとその遊びに加わっても、Y男は保育者の媒介なしに互いの遊びのイメージを結びつけることがなかなかできませんでした。

Y男が一つ大きい年中組四歳児になると、少しず

つ友達と互いのイメージを結びつけて遊ぶことができるようになり始めました。しかし、互いにしっかりと遊べないこともありました。時にY男は、自分の思いを主張し過ぎて友達との間でトラブルとなりました。私はこのようなとき、Y男や共に遊んでいる子どもたちとどうしたらいいか、どう言ったらよかったのか、共に考えるときを大切にしていました。

でも、Y男は友達に言われた言葉ばかりが気になりました。「ああでもない」「こうでもない」と葛藤を覚えていました。「僕はこの仲間の中で受け入れられているのか」とY男が友達との関係の中で、自らの存在を問うことを始めているように私は感じました。私は、Y男が年中組になり、大きくなったことへの自信と不安が入りまじり混乱しているようにも見えました。

そんな五月のある日、クラスの集まりでの出来事です。Y男は「これ読んで」と私の膝の上に一冊の絵本を乗せました。それは『きかんしゃやえもん』

でした。私はこの日に読もうと準備をしていた絵本があったのですが、Y男の持ってきたこの『きかんしゃやえもん』を読むことにしました。

「やえもんはいばってみせますが、だあれもあいてにしてくれませんか。だから、やえもんきかんしゃは、いつもこのごろきげんがわるくておこってばかりおりました」という言葉や「しゃしゃしゃくだしゃくだ」と走り出すやえもんの姿、ほかの電車から笑われたりからかわれたりする中で自らの存在を問いながら葛藤するやえもんの姿に、Y男は共感するところがあるのでしよう。Y男は、やえもんが悔しいときに悔しい表情をし、やえもんが困っているときに「どうしよう」という表情で、弱い立場のやえもんになりきって事件のなりゆきを見守りました。そして、やえもんが喜ぶ最後の場面で、Y男は「やった。よかった」という表情で、話の結末に満足したのです。

やえもとと出会っているY男の表情から、私も子どもが精神的な成長をしていく支えに、絵本は欠かせないものの一つであると確信しました。

## くわずにようぼう

稲田和子再話

赤羽末吉画

福音館書店



五歳児年長組の子どもたちが、自由に遊んでいたときの出来事です。「始まるよ」と、R子は目を輝かせて仲間を集めます。「え、何が始まるの?」と聞き返す友達に、R子は何とも意味ありげに笑みを浮かべ「怖い怖い話」と小声で答えます。「え、怖い話?」

聞いた友達の様子は真剣ですが、興味津々といった面持ちです。「怖い話。どうしよう」と言いながらどんどん子どもたちが集まります。「先生、早く」とR子から催促の声がかかります。私は床の上に腰を下

ろし「くわずにようぼう」と、この絵本の題をゆつくり読み始めました。「あ、ちよつと待つて」両手で耳をふさぎながら、慌てて駆け込んでくる男の子の姿もあります。「とんとんむかしがあったそうだ」という出だしに、子どもたちは昔話の世界にスッと引き込まれていくのです。

昔、一人の男が飯を食わない女房を欲しいと思っていると、飯を食わぬ美しい女に出会って結婚するのです。ところがこの美しい女は実は鬼ばばで、男が仕事に出ている間に頭の上の大きな口へおにぎりをほうりこんでお腹いっぱいにしていたのです。男は鬼ばばの住みかに連れ去られそうになりますが、シヨウブが刀となり、ヨモギが毒汁となり、男を救ってくれたという話です。

私はこの『くわずにようぼう』を子どもたちに頼まれ、毎日何度繰り返し読んだことでしよう。二、三人の子どもたちと読み始めても途中でほかの子ど



もがどんどん加わり、あっという間に人垣ができるのです。途中から参加した子どもが「もう一度読んで」と言いますから、私が何度読んでも絵本は終わらないのです。私は「よし、もう一度」と子どものリクエストを二つ返事で引き受け、子どもたちとの昔話の世界と現実の世界を行ったりきたりするのです。この絵本はなぜこんなにも子どもを魅了するのでしょうか。

一つは、「しっとり しっとりおもたいわい」などの感覚を言葉で表現した擬態語や、実際の音をまねて言葉にした擬音語のおもしろさだと思います。回を重ねて読むうちに、子どもたちは読み手である私の声に合わせて一緒に言葉を言うようになりました。もう一つは、赤羽末吉氏の凄みのきいた絵ではないでしょうか。子どもたちは「何も食わない美しい女―何でも食う鬼ばば」という対極の絵に驚き、息をのみます。また、何よりも子どもたちをぞくぞくと

させるのは、女が頭の毛をばらりとほどくと、そこに大きい口が見える絵です。この絵には子どももそして私もぞくぞくするようなものを感じるので。

五歳児年長組にもなりますと四歳までとは異なり、感情的にも安定してきてむやみに恐れたりすることは少なくなります。ですから「これは絵本のお話ね」といったように現実にはあり得ないものであるということを感じていきます。また、この場には三年間共に過ごした仲間と一緒にいるのです。だからこそ子どもたちは仲間と共に安心して、しっかりとした再話と巧みなストーリー展開、凄みのある絵に夢中になるのだと思います。

この夏休み、無意識のうちにいつも流れる機械的な音や人工的な色彩から離れ、たった一冊でも子どもが何度も「これ読んで」と夢中になるかけがえない絵本に出会ってほしいと私は願っています。

(青山学院幼稚園 教諭)



# 大正・昭和の絵雑誌

式 淳子

## 寄贈された大正・昭和の絵雑誌

大相撲で有名な両国。ここにある江戸東京博物館が、七階に図書室を併設しているのをご存じでしょうか？ この図書室は、江戸、東京の歴史や文化に関する本を中心に収集していますので、小中学生の調べ学習に使える本はある程度そろっています。ただ残念ながら、「今」の小さな子どもたちが楽しく読めるような絵本類はほとんどありません。しかし、歴史博物館の図書室ですから、「今」のご年輩の方々が、「かつて」小さな子どもだったときに読

んだ本の管理・保存はしているのです。

引つ越しや改築などで家の中の整理をされる方から、まとまった寄贈を受けることがあります。最近も、大正末から昭和の初めに発行された子ども向けの絵雑誌が、ある方から送られてきました。『幼年書報』『子供之友』『ポッチャン』『子供界』『キュービー』『コードモアサヒ』『男子幼稚園』『女子幼稚園』『学校へアガルマデ』『ツバメノウウチ』などなど、ざっと数えても三十種以上の絵雑誌がありました。表紙を眺めるだけでも、その色彩の豊かさ、斬新なデザインに目を奪われます。そして当時、幼児から

小学校の低学年向けの雑誌がこれ程多く出版されていたことに驚かされました。

このような幼年向けの絵雑誌は、印刷技術の発達で多色刷りが可能となった明治末ごろから出版されるようになったようです。日露戦争が終わり、いわゆる大正デモクラシーと呼ばれている時代を迎え、子どもの個性や自由な考え方を尊重する風潮が高まります。子どもがもっているみずみずしい感性を引き出し、育てるために、芸術性の高い文芸雑誌や、絵雑誌が数多く創刊されました。『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅰ』（鳥越信編 ミネルヴァ書房）によりますと、大正時代の一五年間で五十種以上の絵雑誌が創刊されているという事です。子どもの教育への並々ならぬ世間の関心を感じられます。

東京女子高等師範学校の教授や同附属幼稚園の主任を勤めた倉橋惣三氏は、『ツバメノオウチ 第四巻 第五号（一九三二・五）』（フレーベル館）の「お母

さまと保母さんの講座 第一回」に「絵雑誌の見せ方」を以下のようにつづっています。

「子どもは自分で考えるところがあり、楽しむところがあ、その絵の中へ自分を没頭させているのであるから、その大切な心境を乱してはならない。」

確かに子どもが受け入れやすく、熱中でき、かつモダンなデザインで表現されている絵が数多く載せられています。また、

「子どもの質問は、教えて貰って正しい知識を得ることよりも、子ども自身で疑問をもつということに、何倍か大きい値打ちをもつものなのであるから。」

とあり、この考えは、私たち司書が子どもたちからのレファレンスを受ける際に、今も基本としていることです。

これらの絵雑誌の画家名を見ると、昭和二年に結

成された日本童画家協会のメンバー、岡本帰一、川上四郎、清水良雄、武井武雄、初山滋、深沢省三、

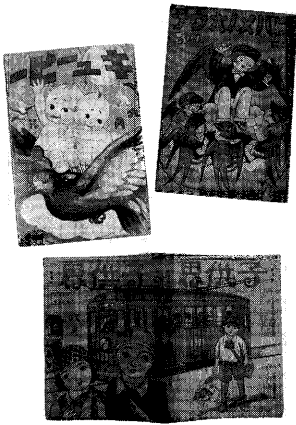
村山知義ほか、童画の第一人者の名前が並んでいます。『キューピー』（オサナゴ社）など、画家名が明記されていないものもありますが、それらも美しい色合いの絵から少々シュールな印象を受ける絵ままで、一冊十数ページでありながら、バラエティに富んでいます。たとえば美しいハトに乗って大空を飛ぶキューピーや、眼鏡をかけた猫、子どもの髪や目の色も黒とは限らず、緑であるなど、子どもの想像力を解放する一助となるような絵が多いのです。

大正末に発行されたものは、かわいらしい帽子や靴を履き、モダンなファッションに身を包んだ子どもたちの絵が多く見られますが、昭和一〇年近くになりますと、徐々に国旗を掲げた兵隊の格好をした子どもの絵が目立ってきます。雑誌はこのような時代背景も敏感に映し出します。

### 絵雑誌の保存管理について

さて、貴重な絵雑誌の寄贈を受け、博物館資料として活用させていただくまでを少し記しておきたいと思います。これらは保存状態がかなりよかったです。ですが、それでも八〇年以上も前に発行されたものが多くあります。まず当館では、殺虫、殺菌を行うために、本に害のない薬品で燻蒸作業を行います。その後、一ページ一ページ、はげや柔らかい布、場合によっては消しゴムなどを使って、手作業でクリーニングをします。それからようやく書誌データの入力に取りかかります。これは一冊ごとのカルテになるようなものですから、その本から読み取れる情報や状態を入力し、一冊ずつの登録番号とバーコードを付与して管理していきます。

特に年月を経た本によっては、ステープラがさび、そこから紙も劣化していくなど、破損が著しいもの



▲「ツバメノオウチ」(第4巻第5号/1932.5 フレーベル館)  
「子供界」(第8巻第7号/1926.6 宏文社)  
「キュービー」(第6巻第9号/1927.9 オサナゴ社)  
資料提供: 東京都江戸東京博物館  
<http://www.edo-tokyo-museum.or.jp/>

もありません。そこで本専門の修復業者の方に修理をお願いします。修復の方法は、その図書の利用の仕方によって変わります。一般の方々の利用に供する本は、博物館資料として原状回復を可能にすることを念頭に置きながらも、ある程度の強度は保てるような修復をしていただきます。一方、今回の絵雑誌のように、普段は収蔵庫に収め、展覧会に使用したり、一般の方々へ制限を設けて利用していただくものに関しては、手を加え過ぎないように修復をお願い

いています。破れてしまった所は和紙などを似たような色に染めて補強をしたり、ページがはずれてしまっていれば糸綴じにしたり、違和感がないようにしながらしかも、後年に修復したことがわかるようにします。

絵雑誌は絵で多くを表現している分、時代の移り変わりが顕著にわかり、本の素材や印刷技術からその時代背景がうかがえるので、そうした魅力を失わないような保存管理が必要となるのです。現在はまだ整理中ですが、なるべく早く資料として活かせるよう、また未来にも伝えていけるようにしていきたいと思います。

最後に、図書室では、小中学生を対象に「夏休み！歴史学習相談」を行い、本を紹介しながら自由研究や課題を解決するお手伝いをしています。この機会にぜひ図書室をご利用ください。

(江戸東京博物館 司書)

# お父さんだからこそその絵本

田中尚人



パパ'S絵本プロジェクト  
[http://www.ehonnavi.net/ehon03\\_papa00.asp](http://www.ehonnavi.net/ehon03_papa00.asp)

日ごろ、子どもと楽しむ絵本時間を習慣にしているパパ四人が集まって、「ほかの子どもたちに読んでみたら、どういう反応が返ってくるのかな」という単純な好奇心から始まったのが、「パパ'S絵本プロジェクト」の発端だ。

男性、それも現役育児中のパパが絵本の読み聞かせをするというのが当時珍しいことだったのか、各地の図書館や児童館、保育施設からお呼びがかかり、五年前の結成以来、月二回のペースで北は岩手県から西は四国や山口県まで、全国を楽しく回っている。月二回に限定したのは、家族と過ごす時間を最優先

したいからではあるが、本音はそれ以上休日に出ると、ゴルフに忙しいパパみために、妻に愛想をつかされてはまずいからだ。

もともと、読み聞かせの勉強をしていない僕たちの読み方は、型破りで従来の正統派の読み方とは全く違うのか、行く先々で「そういう読み方をしてもいいんですね。何だか気が楽になりました」という感想をよく聞く。

「そういう読み方」とは、①子どもたちに行儀よく聞くことを強制しないどころか、読んでいる最中に返ってくる歓声や驚き、質問などを大歓迎している

こと。②アドリブを入れたり、途中でページを閉じて子どもたちとするおしゃべりを楽しんでしまおう。③会場の子どもの反応に応じて、プログラムをどんどん変えるのが当たり前、ということ。

僕たちにとつての絵本とは、コミュニケーションのツールであつて、一方的な読み方を押し付けたり、おとなしく絵本世界を受け取つてもらふことよりも、その絵本を通じて、「子どもたちとどれだけたくさんの生きた言葉のキャッチボールができるか」を、僕たちは一番大切にしている。絵本に入るための入り口は一つではなくて実はたくさんあるはずだし、昔と違ってゲームやテレビなど、子どもたちを中毒にする装置がこれだけ多い昨今、「絵本が大事」と説くよりも「絵本って、楽しいよね」と子どもに五感で感じてもらうなければ、空振りを繰り返すだけになつてしまふはずだ。だから、僕たちは自分たちの活動を「読み聞かせ会」とは呼ばず、「お話し会」あ

るいは「絵本ライブ」と呼ぶことにしている。最近では、絵本に併せて楽器を演奏したり、お父さんやお母さん向けの講演も行うようになった。男性が読むということが当り前の世の中になるまで、この活動はもう少し続きそうだ。

お父さんとお母さんでは、子どもへのしかり方も褒め方も違う。遊び方も、勉強のさせ方も、見せたテレビ番組だつて全く違うわけで、その違いがあるからこそ、時には一方に逃げ場を求めたり、甘えてみたり、逆に厳しさに直面しそれを乗り越えることができる力を身につけていけないのではないだろうか。僕は、絵本も同じではないかと思つている。子どもに「善かれ」と願う母親や先生方に完全包囲されて、「よい絵本」と呼ばれる定番絵本ばかり押しつけられては誰だつて肩がこる。ここは父親的な目線、つまり清濁併せもつた視野の広さと遊び心、いたず

ら心、つまりばか心に満ちた絵本が加わることで、バランスが取れるのではないだろうか。栄養バランスの取れた食事はもちろん大事だけど、ロースカツや味の濃いラーメン、ヒーヒーしてしまいうくらい辛いカレーのうまさも知らないようでは、たとえ健康になってもおもしろみがないのと同じ。

自宅の絵本棚は、ママが選んだ絵本しかなく、園でもはかばかしさでいっぱいなのナンセンス絵本や、ちよつと下品だったり、残酷な昔話などはあまり読んでもらえない。「善かれ」と思うあまり、優しげな内容や結末を作り替えたものを与えようとするケースも目立つ。たとえば「猿蟹合戦」。最後に猿が白につぶされるのではなく、猿が蟹に謝って、あろうことか仲良しになる、という絵本も出回っている。けんかしても、すぐに仲直りさせたがる大人の表面的な博愛主義で中途半端な介入することが、子ども同士の対人関係づくりを壊していることに気がつい

ていない。

であれば、そういう絵本こそ父親的カテゴリーと呼べるかもしれない。つまり、ママや先生たちが選ばないような絵本、ということになる。男性だからこそ、低くて粗野な声が活きる鬼、怪物、怪獣などが登場する怖い絵本、うんこやおしっこ、おならをテーマにしたビロウな絵本、意味不明だけど、なぜかおかしくて何度も笑いがこぼれるような絵本、極端なプロセスがあるからこそ切なさやむごさ、世の不条理さがいつまでも印象に残るような昔話や寓話などなど。自宅の本棚になれば、お父さんが買ってあげてみてはどうだろうか。

お父さんが絵本を読むという習慣は、子どもとお父さんのかけがえない時間になるはずだし、お父さんの早い帰宅も促すから、育児一辺倒のママにも、やっと一区切りできるコーヒータ임을プレゼントできる。結果的に家族みんなの笑顔が増えるはずだ。



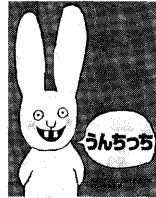
パパだからこそその絵本セレクション

さて、そんなパパだからこそその絵本で、僕が  
気に入っている絵本を紹介しよう。

(グランママ社編集長・パパ'S絵本プロジェクト・メンバ  
ー PPO 法人ファザリングク・ジャパン 理事)

うんちっち

ステファニー・ブレイク作・絵  
ふしみさお訳 P H P 研究所  
タイトルのとおり、子どもにはパ  
カ受けする必笑ナンセンス絵本。  
僕はこれを幼稚園で読み、行  
儀のよい子どもたちを粉砕した経験あり。絵本は子どもの心  
を豊かにするために必要、と信じている方、試しに子どもに  
読んでみてください。



つきよのかいじゅう

長新太作 佼成出版社

ドキドキハラハラして待っていた  
結末は、とんでもないナンセン  
ス。涙が出るほど笑えるけれど全く「ためにならない」絵本。



ねえ、どれがいい？

ジョン・バーニングガム  
まつかわまゆみ訳 評論社  
何の役にも立たないけれど、抱腹絶  
倒の究極の選択肢が勢ぞろい。子ど  
もたちのみずみずしい反応が、クセ  
になる一冊。



三びきのやぎの  
やぎのがらがらどん

マーシャ・ブラウン 絵  
せたていじ訳 福音館書店  
トロールの声は本気の怖い声で読んで  
ほしい。結末が残酷だという人もい  
るけれど、これは生存を賭けたヤギとトロールの話。最後に仲  
良しになる、なんて平和主義は自然界には通用しない。



うんちしたのはだれよ！

ヴェルナー・ホルツヴァルト文  
ヴォルフ・エールブルッフ 絵  
関口裕昭訳 偕成社  
下品なタイトル？ だけど、これは  
うんこの科学をサスペンスの手法で  
描いた、多分「ためになる」絵本。



# 青いじつはなをじ悪くはない。

『永遠平和のために カント十六歳からの平和論』を読む

菊地知子・鈴木実乃里



小さな青い本である。表紙には、カント先生であらう人物が、多色刷りの銅板画で描かれている。美しい刺繍の施された服やヘアスタイルこそ当時の学者をほうふつさせるが、やや重たそうな上まぶたに、

巻き毛と同じ茶色の目をたたえたその表情は、気難しさよりもむしろおどけた感じを醸し出している。

ドイツ文学者である池内紀氏による訳は秀逸で、二百年以上も前の、おそらくはやたらとむずかしいであろう哲学者の言葉が詩的ですからある日本語になっている。百十数ページの本の前半五十ページ弱は、本文から抜粋された短文と写真とのコラボレーション

ンになっていて、後ろ半分が本文の全文と補説、付録、そして訳者解説である。

編者の池孝晃氏のこだわりにより、前半に文章と写真とのコラボレーションというスタイルをとったことで、この小さな本は、絵本かたまた上質の詩画集の趣を呈している。水面を飾る濃いピンクのスイレンの花。物悲しい目をした白馬の背で、少し不安そうな面持ちの白い衣をまとった少年。三人の熟練した写真家による写真はどれも、鋭くかつ優しく、ファインダーをのぞくそのまなざしの故だろうか、訳者言うところのアフォーリズム（警句）を、さらに

鋭く私たちに突き付ける。言葉も写真も、淡々と語られるそれでありながら、である。

一つの「夢」や「理想」を明るく語れるほど幼くはなく、さりとて大人びた諦めや達観もままたらないう十八歳が、父親から差し出されてこの本を読んだ。父親は多くを語らない。「やさしい子だからさ。」とだけ、言い訳のように連れ合いの私に言って、生きるのにあまり器用になれない娘に、この本を選んだ。自分を肯定して生きやすくなるための処世的なものも、叱咤勉励のたぐいも、選び得たであろうに。父親が選んだ本を、娘は特に熱心に、というふうではなく、それでもともかく読んだ。読後につづったものが以下である。

正直なところ、この本を開くまで私はカントという哲学者について、本当に何も知りませんでした。彼が説いたという「純粹理性批判」や「実践理性批

判」の何たるかは言うに及ばず、カントがどこの国に生まれ、どの時代を生きたのかさえ知らないまま（その上、うかつにも冒頭の「カント先生の紹介」というページを飛ばしたまま）この本を開き、カントに出会いました。

私がこの本を開いて最初に思ったことは、永遠平和という大きな目的のためになされなければならぬ事柄としてカントが提示している一つ一つの内容は、言われてみれば「あたりまえ」のことばかりだということでした。

「いかなる国も、よその国の体制や政治に、武力でもって干渉してはならない」

「かぎられた土地のなかで、人間はたがいに我慢し合わなくてはならない」

また、冒頭には、

「平和というのは、すべての敵意が終わった状態をさしている。」とあり、永遠平和の何たるかが語ら

れています。平和というのは永遠という語をつけないくても、そもそもが永遠であるはずだということでしょう。

淡々と語られているそれらは、そのまま「あたりまえ」であり、きっと誰もが知っていると思つていいことは十分に感じられました。

それらの「あたりまえ」を一つ一つ確認していくことで実現される永遠平和が、現実主義者にとつては空虚な理念になるのだとしたら、私にとつてはそれこそが不思議です。

目指されて然るべき人間の社会の状態を「永遠平和」とひねりなく見据えて、カントの言葉は語られます。明快で迷いのない言葉は、心地よく軽妙な日本語訳のなせる業なのでしょうが、まるで現代のために書かれたかのような新鮮さが感じられるものでした。少なくとも私が訳者による解説を読んで『永遠平和のために』が二百年以上も前に著されたもの

だと知ったときに、深く驚嘆したことは隠し得ません。

「国の軍隊を、共通の敵でもない別の国を攻撃するため他の国に貸すなどということはあつてはならない」

というカントの言葉を、どこぞの国に贈りたいと思うのは私だけではないと思います。

ともかく、カントの語つた平和論は、二世紀という時間の隔たりを超えて私たちに永遠平和への道標を示してくれているに違いないと思うのです。

私は、多くの若者がこの本と出会い、そして自分たちに関係なく複雑に構成されているように思わされている本当のことに改めて気づくきっかけになることを願つてやみません。そしてまた、多くの大人がカントの言葉に耳を傾け、もう一度平和と向かい合つてくれればいいと思います。

そうして、きっと誰もが多かれ少なかれ気づいて

いる平和の大切さを、また平和のために知っているべきことを、これからの地球に生きる人たちみんなに伝えていくことができれば、永遠平和は実現されるのだと、誰もが思えることを願わずにはいられせん。

人は、長い長い間戦いを繰り返し、ゆっくりゆっくり何かに気づき、老哲学者が書き残した平和論の小さな本のはこりを払ってそれを開きました。そして、それでもまだまだ戦いを繰り返しながらも、永遠平和を目指して国際連合を組織しました。それはそれは遅々とした歩みなのだと思います。しかしまた、確かな歩みでもあるのでしょう。何も諦めることはない、絶望する必要はないのだと、私はひそかに、でもしっかりと感じています。

カントは、生まれ故郷東プロシアの首都ケーニヒスベルクから、生涯ほとんど出なかつたのだという。

一八〇四年に八十歳目前で没したカントは、一七九五年、七十一歳の時にこの本を書いた。「バルト海の真珠」とうたわれ、複数の民族、人種が共存しながら民族紛争を起さなかつた町から、世界を見た。やむにやまれぬ思いで、また、啓蒙家たる哲学者の果たすべきこととして、カントが「永遠平和」を語ってくれて本当によかつた、と私は思う。理想を語るここそ時に現実を変えるかもしれないのだと、大人だつて青臭くていいのだと思えるような、そんな「心のスキ」をもつことが、誰に対しても許されている思いがする。娘にも、そして私にも。

(お茶の水女子大学 幼児プロジェクト 専任講師)

永遠平和のために

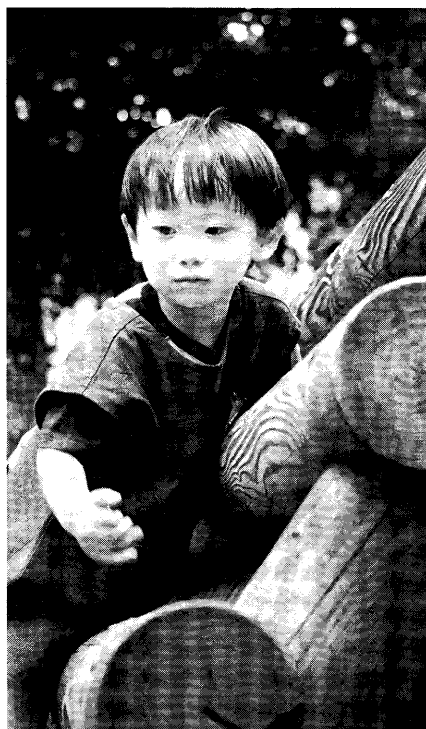
カント十六歳からの平和論

イマヌエル・カント著  
池内 紀訳 綜合社

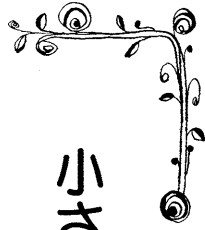


あ る 日





撮影・平野 清



## 発達心理学者の子育て奮戦記(4)

# 小さな反逆児

長田 瑞恵

### ことばの誕生

私の娘が初めて話した意味のあることば(初語)は「ワンワン(犬)」でした。一般的には初語が何であったかがよくわからないということも多いようですが、娘の場合は、ちょうど一歳を過ぎたある日、散歩中に犬を見て突然「ワンワン」と言うようになったので、それが初語だとはつきりとわかりました。

「カータン(お母さん)」という初語を期待して

いた私は少しがっかりしたものの、意味のあることばで娘とのコミュニケーションが成り立つようになったことを大変うれしく思いました。また、初語が「カータン」でも「トータン(お父さん)」でもなく、「ワンワン」だったことにおもしろさを感じました。というのも、娘が母親である私をよく見ているなあと感心したからです。私は犬が大好きです。そのため、娘との散歩中に犬とすれ違ふと、「ほーら、ワンワンよー。ワンワン、かわいいねー」などと言いながら娘と一緒に犬を眺めて



いました。そのような経験を重ねていた娘は、初語が出たその日、私の大好きな犬を見つけて思わず「ワンワン」ということばが出たのだと思います。

子どもは周囲の大切なことをよく見ています。そして、大切な人が好きな物、嫌いな物を敏感に見分け、自分も大切な人と同じように振る舞うようになると言われています。娘の初語は、そのことを私に実感させてくれるものでした。

## イヤイヤちゃん

ことばが開始したころから娘のイヤイヤは徐々に現れ始め、一歳二か月を過ぎたころから本格的になっていきました。

最初に出たイヤイヤは食事のときでした。それまでは多少苦手な物でも口の中に入れてしまえば洪々食べていたのに、このころから嫌いな物はそ

のままべえーっと口から出すようになりました。

一度、口から出すようになると、その後は頑として食べません。無理に食べさせようとしようものなら、あたり一面に食べ物を投げ散らかします。

朝のばたばたしているときに散乱した食べ物を片づけながら、「また食べてくれなかった」という落胆と「忙しいのに投げ散らかすのだから」という少しか恨みがましい気持ちとが入り混じった複雑な思いに駆られました。

やがて食事の時間を皮切りに、娘のイヤイヤはあらゆる場面で顔を出すようになっていきました。手洗いがイヤ、歯磨きがイヤ、着替えがイヤ……。

もっと幼いころにも着替えを嫌がることはありましたが、それは眠かったり体を拘束されることを嫌がったりといった単純な理由のことが多かったように思います。一方、最近のイヤイヤは、用意された靴下が入らなかつたり、自分の好きな

場所に座って着替えたかったりといった、もつと複雑な理由であることが多くなってきました。そして理由が複雑になってきた分だけ、娘の要求が私にうまく伝わらず、ますますイヤイヤが激しくなってしまうということが増えてきました。

もちろん、すべてのイヤイヤがずっと続いているわけではありません。たとえば、食べたくない食べ物を床に投げ捨てるという実力行使はある時期に徐々に減っていききました。それは娘が首を横に振る動作を覚えたころでした。首を振ることで「いらない、食べたくない」という意思表示をすることができるようになり、自分の思いを親に伝えることができるようになったのでしょう。また、「ダメ」「イヤ」といった拒否のことははじめ、さまざまな言葉が増え始めてきてからは、ただ泣きわめくだけではなく、親に自分の意思を伝えようとするような行動がますます増えてきました。



次第に食べたくない物を口から出すだけではなく、積極的に自分の食べたい物を指さしたり、こぼで伝えたりするようになってきました。

娘のイヤイヤには娘なりの気持ちが込められています。「反抗のための反抗」というようなイヤイヤすること自体が目的であると思われる場合もあります。たいていはそれなりに思うところがありますが、言いたいことがあるようです。そして、まだまだ充分ではない言葉を最大限に使って懸命にコミュニケーションを取ろうとしています。私はそんな娘の気持ちを受け止め、できるだけ娘の意図

を汲んで応じたいと思うのです。

しかし、そんな私の努力も常にうまくいくとは限りません。なかなか娘の意図が読み取れず、娘のイライラが高じてそれに私が巻き込まれているうちに、次第に娘自身も何に不満をもっていたのがわからなくなってしまうと、泣きわめくだけになってしまふこともあります。

## 鏡

私にとって子育ては、時として自分自身と向き合う瞬間でもあります。子育てには自分の価値観や歴史が知らず知らずのうちに反映されるように思います。そして、娘の様子は私の気持ちを映し出す鏡のように思えることがあります。私に気持ちの余裕があれば娘もゆったりと過ごしますし、私が参っているときには娘もどこかイライラとしてくるからです。

娘のイヤイヤが始まってから、育児日記には「深呼吸」「余裕をもって」といった自分自身に言い聞かせるような記述が登場するようになりました。そして娘についても、「母に余裕があるときは穏やか」といったような内容が書かれるようになってきました。

ある程度年齢を重ねてから子どもに恵まれたこともあり、娘に対して深呼吸が必要なほど感情的に怒りたくなるということはそんなに多くありません。しかし、それでも時折、娘の行動を「腹立たしい」と感じる瞬間があります。娘のイヤイヤのほとんどは腹立たしくないのに、ある特定の場面、特定の行動に限って、とても腹立たしく感じることもあるのです。

そういうとき、怒りたい気持ちをぐっと飲み込み、息を吐き出しながら考えます。

「なぜ、私はこんなに腹立たしく感じるのか。ど

うして、この行動だけこんなに嫌なのか」

すると、いろいろなことが見えてくるような気がします。私が普段意識していない価値観、子ども観、娘に対する期待、自分に対する期待。そしてそれらを通してさらに見えてくるのは、自分の子どものころのことです。幼いころに親からしつけられ伝えられた「あるべき姿」や人間関係のとらえ方が、そこにあるような気がします。

自分の中のさまざまな価値観や基準が自覚されてくると、腹立たしく感じた娘の行動もそんなに目くじらたてるほどのことでもないと思えるようになることもあります。自分が無意識に「当たり前」と思っていたことも、本当に必然性が高いものは実はそんなに多くないからです。

しかし一方で、腹立たしく思う理由が自覚できても、なお、腹立たしさが消えないこともあります。そういうときは、私が友人から子育ての相談

を受けるときに伝えることはを自分自身に言い聞かせます。

「子どものイヤイヤは成長の証。でも、母親だつて人間なのだから、腹が立つのも当たり前」

このことは気休めかもしれませんが、しかし、怒りからかれ、また、そんなふうに感情的になつてしまう自分を受け入れられないために、子育てがつらくなつてしまってお母さんたちも多いように思います。私も含めたそんなお母さんたちの気持ちが少ないでも軽くなるように、時には「人間だから腹も立つさ」と気楽にいきたいと思うのです。そして、子どもの成長に喜びを感じつつも、イライラしてしまう不完全な自分を受け止めたいと思うのです。思いどおりにならない自分自身の気持ちを認めて許容することが、思いどおりにはならないことの連続である子育てを受け入れることにつながっていくように思います。

娘は一歳十一か月になります。今朝も、布団から出たくない、パジャマを脱ぎたくない、パンを食べたくない、チーズを食べたくない、手を拭きたくない、椅子から降りたくない、歯磨きをしたくない、靴下をはきたくない、シャツを着たくない、髪の毛を結いたくない、この上着よりもあちらの上着の方がよい……とひとしきりイヤイヤを連発してから保育園へと向かっていきました。朝のイヤイヤの原因のほとんどは、忙しく動き回る両親の気を引きたいからのようです。イヤイヤを適当に受け流そうとしようものなら、娘のつきつ



ける難題はさらにエスカレートしていきます。そのため、一つ一つのイヤイヤをできるだけだけていねいに、しかしできるだけ要領よく受け止めていくように智慧をしぼります。まるで障害物競走をしながら出かける支度をするように、朝の時間はあつという間に過ぎていきます。

この小さな反逆児の行動の一つ一つは、娘が娘なりに世界を理解しようとし、人間関係を調整しようとし、自分のできることを試そうとしている証です。そして思う存分反抗できるのは、娘が私たち両親を信じて安心しているからなのだと思います。イヤイヤはしばらく続きそうですが、「これも今だけ」と楽しむくらいの気持ちで娘を見つめていきたいと思えます。

(十文字学園女子大学 専門は認知発達)

主な著書『知識獲得過程についての理解の発達』

風間書房 二〇〇三

上海⇄東京

## 子育てメール便 (4)

橋本 雅子  
津守 多実

まさことたみは東京の養護学校での仕事を通じて知り合った子育て仲間。まさこは夫、申屠（スンドウ）の出身地である中国上海に転居し、義父母と同居生活を始めた。まさこの子ども愛佳は未就園の三歳女児。たみの子どもクナは東京都心の幼稚園に通っている五歳男児。上海と東京、都会の子育てで二人が直面している、遊びの問題について語ります。

### 外遊びでの子どもの動き

まさこ「言葉のやりとりを補っために、体の動き方をよく見ています。実は上海で生活し始めてから、遊ぶのが最中の子どもものの体の動きが気になっています。

きつかけは追いかけて、上半身と下半身がちくはくした動きが目につきました。肩下げかばんのように両腕を揺らし、膝を曲げずに走る姿を不自然に感じましたが、同伴の親は気にしていませんでした。

ほかにも、健康器具をジャングルジムや登り棒にして、愛佳がよじ登る様子を見て、年長の子たちがまねしたことがあります。彼女より大柄ながら、私がお尻を持って体重を支えながら、足先や膝の動きを補助して、ようやく登れる子が何人もいました。大人の腰ほどの高さに、足で登りながら、腕の力で自分の体を持ち上げる動作

ができません。よじ登る体験が乏しいのでしょうか。自分の体の動き方をよく知らないように思えました。

たみ 以前、愛佳ちゃんはクナの後ろを追いかけて動きをまねていましたよね。愛佳ちゃんもクナも、能力を少し超えたことに挑戦するのが大好きでしたが、もっと年上の子どもの活発な動きには圧倒されていたことを思い出しました。

まさこ 今は逆で、愛佳の遊びをまねたがるのは年上の子が多いです。その子たち、走る、ボールをける以外は、ゆっくりとした動作で遊び、目新しい動きには慎重な様子も見受けられます。遊ぼうと

言っても、ベンチで父親に抱かれ

たまの男の子の前で、私たちが追いかけてこやジャンプをして体で遊ぶ楽しさをアピールし、誘い出したこともありました。わんぱくな時期の、小学校中学年の男の子の動きすら、抑制がきいていて、はめを外すような危なかしさはほとんど感じません。

ほかの小区でも、祖父母の散歩に連れられた幼児を見かけます。池や噴水、遊具、広場やまっすぐの長い道など、遊び心をそそられる場所を通っても、本物の車を模した電動カーにちょこんと座ったまま、自分から降りたがったり、歩きたがらないおとなしい様子

を、少し不思議に思います。

以前、申屠がプランコをこげないことを、個人差かしらと笑い話でしましたよね。プランコ体験が薄く、運動好きで練習したものの、いまだに肩に力が入り、遊びこなすには程遠いです。その彼、幼いころは人民解放軍ごっこを称し、追いかけてこやかくれんぼをしたことが楽しかったそうです。

余談ですが、上海に来て、若者が滑り台を本気で遊んだり、歩道で楽しそうに追いかけてこする姿を見かけます。日本なら、レジャースポーツをするとき以外に見られない無邪気な様子は、遊びの体験が異なるせいなのでしょう

か、文化的な所作の違いなのでしょうか、ほほ笑ましくも珍しくもあります。

## 子どもの運動能力と 大人のかかわり

まさこ 日本同様に、中国も子どもの運動能力の低下は問題視され、体育の授業を増やす案も出ています。

たみ 日本も中国も、保育的にはさまざまな考えがあったとしても、子どもの運動能力の低下には危機感をもって保育内容を設定しているということでしょうか。

クナの幼稚園では、大工仕事や手押し車での砂運び、氷鬼やケン

ケンなど、楽しく体を使って遊ぶ工夫が日常的にあります。体操教室に通っていて、跳び箱やマットで宙返りができる子がいる反面、著しく走り方がぎこちない子もいます。幼稚園の遊びの中では、運動能力が違ってても、一緒に遊べるように配慮しているのかもしれない。

まさこ 小区の大人は、「幼稚園でスポーツや体操や民族舞踊などでよく体を動かしている」と得意気に教えてくれます。私たち、中規模幼稚園のお迎え時の園庭開放を利用しています。時間帯や、園の規模に関係しているのか、個々にコンピカーなどの、遊具で遊ぶ姿

が目立ちます。子ども同士で走り回ったり、遊んだりする様子がほとんどなく、愛佳もほかの子を横目に、一人で遊具で遊びます。

中国の育児は乳児をハイハイさせず、抱いてばかりいると聞きまです。年齢が上がるにつれ、ぎくしゃくした動きが目立たなくなるのは、幼稚園のカリキュラムや、遊びの体験が増えてくるからでしょうか。ただ、見聞きする家庭の様子からは、訓練的に個々に身体能力を高めることほどには、日常の遊びや、子ども同士で遊ぶことを大事なことでとらえていないように思えます。幼稚園に迎えに来た大人が遊ぶ子どもの腕を強く



ひっぱって、果物やヨーグルトを子どもの口に入れる姿を見ていると、遊ぶことよりも、「食べる」ことを優先している印象をもちます。

また、ほかの子と遊んでいる最中の孫を呼び、立ち話相手に習得した踊りを披露させたり、私に日本語を教えさせたり、むしろ教育熱心な日常をつかがわせます。子どもはつまらなさそうなのに、文句を言わず、言いつけどおりに動きます。

### 子ども同士の遊びを求めて

たみ 体の発達のためだけでなく、子ども同士で遊ぶことの中でしか得られないことがたくさんあ

るでしょう？

クナの三歳以前のことですが、私が体を使った遊びに誘うと、一緒に遊んでいた私が先生のようになっつまらなくなっていました。それが幼稚園に通い始めて、ほかの子の様子をずっと見ている期間を経て、そろりと子どもたちの中に入り始め、手をつないでぐるぐる回り、飛び跳ね走り、顔を見合わせて笑い合うようになりました。大人から「教えられる」ことよりも、子ども集団の中で引き出されていくもののほうが明らかに大きいのです。

友達と走り回っているクナの様子は、体中が楽しさで弾んでいる

と同時に、人と繋がって生きることの喜びを体感しているようにも感じられます。

まさこ きこちない動きの理由をいろいろと憶測するものの、ほかの子の遊びに惹かれ、自分も遊びたいと目を輝かす子どもの姿は、日本も中国も変わりません。愛佳と一緒に上海の子ども世界にとびこんで、つくづく思います。

たみ 愛佳ちゃんがほかの子とも遊ぶためにはどのような工夫をしていますか？

まさこ 新しい生活圏に慣れるまで母子でじっくり過ごそうと決め、一日の大半は、祖父や私と過ごす時間になっています。公的な乳幼



児向け施設がないため、子どもと出会うには工夫が必要です。休日は友人親子と会い、平日は公園や園庭開放を利用するほかに、夕方五時以降に時どき、自宅前の小公園に子どもたちが集まる日があります。小区に隣接した幼稚園に通う、近所の年長児のようです。

ボールけりをしたり、集まっておしゃべりしたり、自転車やローラーブレードで一人遊ぶ子もいれば、時には親とバトミントンをする子もいます。同伴の祖父母はベンチに座り、賑やかにおしゃべりを楽しんでいます。

私が疲れていると、活気ある場

へ加わることに気後れしますが、行けば言葉たどたどしくも、私を介してやりとりが生まれ、顔見知りの子がいれば遊びに誘ってもらえます。愛佳はこのところ、中国語でなくては、相手に通じないということが腹に落ちた様子。言葉にかかわらず仲間に入れてくれるか、言葉がなくても一緒に笑い

合えるか、そこに勝負をかけているように見えます。無理なときは、あっさりするほど早くに自分の遊びを始めます。

子どもと会えず、がっかりした日には、夜の散歩に誘います。親子三人のときには大人と散歩に来たほかの子どもに声をかけます。

申屠に世間話で引き止めてもらう間、私と子ども二人、追いかけてこをして全力で遊べます。日本では一日の収束に向かう時間帯に、何とか、子ども同士の接点が生まれます。

確かに、大人が自分の生活ペースを変えてあれこれ整えなくては、子ども同士が遊べる機会をつ

くれない難しさはあります。ですが子ども同士の遊びの躍動感や活気は、どうしたって大人にはつくれません。遊びでひらめいた喜び、実現できた満足感、子ども同士で遊べた充足感は、子どもの全身にみぎります。それは身体感覚の要になり、ともにいる大人を力強く励ましてもくれます。

たみ 大人が設定しないと、子ども同士が遊ぶことができないのはこちらと同じです。東京都心にあるクナ幼稚園では、さまざまなる理由から降園後に園庭で遊ぶことは禁止されていて、延長保育はなく、遅くとも二時には降園です。

園の前は大学の教室で、車の通

りもあり、子どもが遊ぶ環境ではありません。お迎えの後、子どもたち皆遊びたくてワーツと飛び出してくるのですが、はめをはずした子どもたちのケンカやケガが多く、幼稚園でせっかいい関係が築けてもくずれてしまいます。幼稚園の先生も、親も、園後に子どもたちの活力を受け止め、関係を深める場が必要だということはわかっていますが、帰り道に一緒になった子と遊びながら帰るのがせいぜいです。

児童館に友達と行くこともありですが、室内遊具や決められた工作コーナーを回ると、最後にはコンピュータに子どもたちが集ま

って、黙々とモニターを見つめ、これでいいのかと疑問を感じます。

母親たちの話題に上る体操教室は、若い元気な男の先生が子どもたちのリーダーになって鬼ごっこやマット遊びをさせてくれるとのこと。「お教室」でなければ鬼ごっこも存分にはできないこちらの状況です。愛佳ちゃん同様、ほかの子どもと一緒に走り回り、ともに笑い合うだけで満足なのに、そのことをかなえてあげられません。

津守（愛育養護学校、造形アート遊

びの提案・研究をしている）

橋本（元愛育養護学校、現在は母親

としてクリエイティブ保育を志す）



香 岐 島 便 り 2

## 命のつながり

文・カッタ  
田内英理子

長崎県の香岐島では、神様を祭り、お参りすることと先祖供養が、毎日の暮らしの中に本当に当たり前にあります。毎朝、神棚と仏壇に水とご飯を供えます。月の初めの日「おついたち」には、神棚を拭き清めてお供えをし、初瀬の地の神様である鏡岳神社にお参りします。夫の祖父母の命日にもお供えをし、お墓参りもします。お墓の掃除をしながら、そしてお供え物を作りながら、夫の祖父母や叔母の思い出が語られます。「じいちゃんは、豆ご飯が好きだったよね」「ご飯がきつね色に焦げてないとだめだった（当時お釜で炊いていた）」とか、「これはばあちゃんがよく作ってくれたんだよ」などと、毎月の命日のたびに折々の思い出が語られ、会ったこともない夫の祖父母に親しみがわきます。思い出が語られる間、皆の言葉の中に祖父母は生きているのだなと思います。

結婚して、夫を海に送り出すようになり、また、子どもを授かって、私は初めて「祈る」ということがわ

かったように思います。風が出た海を見ながら船の無事を、また高熱やせきが続いたり、アトピーではおがただれて体温が下がってしまった息子を抱いたりしながら、私は祈らずにはいられませんでした。息子たちがが無事に生まれ、ここにこうして日々を送れるのは、見えない大きな力に守られているおかげだと思います。

毎日の暮らしに、神様や仏様に手を合わせる時間があることは幸いです。生かされていることへの感謝と命のつながりを忘れずにいられるからです。私が幼いころに一人で留守番をするときには、母も神様と自分の亡き祖母に「この子を見守ってください」と祈って出かけたということです。いつも私と手をつないでいた長男が小学校に上がり、友達と登下校するようになってから、私もまた毎日「どうか無事で」と祈っています。船が漁に出るときも、義母と私は手を合わせています。生きています。そしてきっと亡くなつた人たちの祈りとまなざしの中に、暮らしが守られ支

えられているという気がしてなりません。

八月のお盆には、亡くなった方たちが家に帰って来ます。十三日には迎えだごを作ってお墓に迎えに行き、三日間家で過ごししてもらうのです。八月に入ると、家を片付け、掃除をして、ご先祖様に過ごしてもらうひな壇を用意します。ご先祖様が家に帰っている間は、三食とお茶を脚付きのお膳で供します。このお膳には必ずとろてんが付けられるのですが、このところてんはつかずに四角に切って盛られます。ご先祖様が鏡としてを使うからだそうです。八月になると近所どころてんを炊く煙が立ち上り、「ああ、お盆だなあ」と思うのです。

そして十五日には、ご先祖様をお墓に送ります。迎えだごは、義母がぬりかけだんごと呼ぶ小さなだごにあんをかけたものですが、送りだごは葉でくるんだ団子が一枝に幾つもぶら下がったものです。そして夜になると、小さな船（紙箱）にお土産を載せて海に流し


に行きます。新盆の家では、少し大きな船を造って本物の船で沖に出て花火をしながら送ったりします。

数年前、私の母方の祖父の新盆のため久しぶりにお盆を福岡県大川市の母の実家で過ごしました。送り盆の日には、内々の者だけで、祖父をしのぶ叔母の手料理をいただき、日暮れの道をちようちんを下げてお寺まで行き、やはり花火をして祖父を送りました。花火をしながら、子どものころ、いとこたちと遊んだことを懐かしく思い出しました。幼い息子たちに花火を持たせて気をつけてくれる叔父叔母に、かつて私も育まれたのだと改めてありがたく、頭を下げました。祖父が亡くなった日、壱岐から帰っていた私たちは祖父にお別れをしに行きました。私や母のことさえわからなくなっていた祖父でしたが、祖父のたった二人の曾孫である私の息子たちを見ると、目の色が変わり、最後に何か言おうとしたことが忘れられません。この日は祖母の命日で、曾孫に会って安心して祖母が迎えに来

たのだろうと語り合ったものでした。

今の私は、夫のおいやめい、いとこたちを迎える立場になりました。順送りで、私がしてもらったことを返すときが来ました。綿々とながる命の端につながり、この暮らしと命を守って手渡していくことが私の仕事なのだとお盆の月に思います。

(元幼稚園教諭 長崎県在住 二児の母)



私は図書ボランティアとして、保育所でほぼ三年、小学校で一年余り、絵本を読んだり昔話を語ったりしています。私は語りが好きで、昔話を覚えて語るのがとりわけ楽しいです。長い長い間、人の口から口へと伝えられてきたお話は、子どもたちだけでなく、大人も惹きつけてやみません。綿々と語られ続けたことを今語るのも、また命のつながりに連なっているような気がします。九州では、仲間に入ることを「かたる」というので、おもしろいです。



## 夏のおやつスペシャルレシピ



### 夏のジュース

赤ジソジュースは色が美しい！ 煮出した液に、酢を入れたら色が出て、何回作っても「わあっ」とうれしくなります。

梅のハチミツ漬けのジュース・ヒワのハチミツ漬けのジュースは、それぞれの実をハチミツに1年漬け、それをお好みの濃さに割って飲みます。疲れが取れます。お試しあれ。

### 赤ジソジュース

①洗って水切りした赤ジソ 150～300g

②水が沸騰したら 鍋に入れ、

③2、3分したら 取り出します。

④熱いうちに ハチミツ 200cc 酢 100cc を入れ、

⑤冷めてから レモン汁 1個分を入れてできあがり。

### 柿のおやつ

#### 柿アイス

と3と3柿を冷凍にして少し室温に置いて、そのままシャーベットみたいにして食べます。



と3と3柿

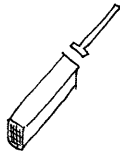
#### 柿ゼリー

室温に戻して柿と寒天で。秋にはマッシュしたサツマイモと混ぜて、おやきやクッキーやパウンドケーキに。

冷凍のフルーツアイスといえば、わが家ではバナナですが、いろいろ試してみました。フドウに桃、イチジク、イチゴ、パイナップルにミカン。それから柔らかく熟したと3と3柿。冷たいので、小さいのを1～3個で満足。食べ過ぎなくていいですね。

### と3と3てん

私にとって夏のおやつといえばと3と3てんで、よく近所の豆腐屋さんでついでもらって食べましたっけ。ここでは、酢の物として食卓に上がることが多いです。



と3と3てんつきでつづのが楽しみで、兄弟げんかの種にも。



おなじみのドラム缶くどでと3と3てんを炊く。

春の磯で取った天草は、洗っては干し、洗っては干しを繰り返します。この回数によって少なければ磯の香りが残った緑がかったところてんに、多ければ真っ白に仕上がります。

## 子どもと保育の情景 (20)

# みんなで遊ぶと楽しいね

戸田雅美

私の勤めている大学には、〇歳児から二歳児までの子どもが生活する小さな保育の場がある。保育を学ぶ学生たちは、ほんの数日ではあるが、この場に身をおいて学ぶ機会があるのだが、多くの学生が、このナースリールームの保育に憧れ、それぞれが経験した、小さなエピソードを生き生きと語ってくれる。

### 一歳児の子どもたちの エピソードから

るなが、一人で、床に座ってままごとの遊具で遊んでいた。その近くで、せいやが、電車の積み木を床に

置いて、走らせて遊んでいた。しばらくすると、せいやが、走らせている電車が、るなの背中にぶつかりそうになった。すると、せいやは、るなに「どいて」と言うように、るなの背中を軽く押す。

ところが、るなは、どこうとする気配がない。わざとどかないというよりも、るなは自分の遊びに夢中で、押されていることには気がついて、それが、どいてほしいという意味だとは、気づかない様子である。しかし、少しも動こうとしないるなの様子を見ると、せいやは、るなを強く押して場所を空かせようとし始めた。



それを見た保育者は、せいやを止めるのではなく、二人から少し離れたところで、身をかがめて両手を床について、「せいちゃん。こっちに、トンネルがありますよー。どうぞ、どうぞー」と楽しそうにせいやを誘った。せいやは、その声と、保育者の体のトンネルに魅力を感じたのか、電車を押して、保育者のトンネルにもぐっていった。それを見た、ほかの数人の子どもたちも、次々と、保育者のまねをして体のトンネルを作り出した。せいやは、電車を押して、友達のとunnelに向かっていった。そんなせいやの遊びの広がりにも、ほとんど気づかないように、るなは、自分の遊びを楽しそうに続けていた。

「先生が、いきなり、体でトンネルを作ったのにはびっくりしました。そして子どもたちが、次々とトンネルになってしまつて、トンネルだらけになったのは、本当にかわいかった」とは、このエピソードを語ってくれた学生の感想である。

## 二歳児の子どもたちの エピソードから

かずきが、一人で、ままごと遊びをしていると、ともことゆうが、近づいてきて「入れて！」という。しかし、かずきは「だめ！だめー！」と強く言う。ともことゆうが、困っていると、保育者が、「みんなで遊ぶと、楽しいのにねえー」とゆったりとつぶやく。ところが、それに対しても、かずきは「だめー！」と拒否する。

「そうかー。みんなで遊ぶと楽しいのになあ。でも、今はいやなのかな……、困ったねえ」と保育者はつぶやく。そして、しばらくすると、保育者は、ともことゆうに向かつて「こっちにすてきなおうちをつくりましょうか」と言つて、かずきが使っていないままごとの遊具を集めて、おうちの場を作つていく。ともことゆうも、最初は、少し不満そうだったが、場がおうち

らしくなっていくにつれて、うれしくなってきたらしく、遊具を手手に、新たにできた場で遊び始める。

「ともちゃん、ゆうちゃん、おいしいご飯作ってくださいね」「何だか、いい匂い、おなかですいてきました」などと、タイミングよく保育者が声をかける。それを聞くと、ともことゆうは、ますます張り切って、手を動かす。そんなふうにして、この場には、だんだんと、ままごとらしい雰囲気が広がっていった。

すると、その雰囲気を感じてか、やすゆきとみどり  
が、「入れて」といつてやってくる。

「どうぞ、どうぞ」と保育者が答えると、「どうぞ、どうぞ」とともことゆうも、お客を迎える主人のように、二人をやさしく招き入れる。といつても、やすゆきとみどりがお客になるというわけでもなく、四人は、思い思いの場に、座ると、それぞれが鍋をかき回したり、おもちゃの食材を切るまねをしたり、料理をし始める。

こんな具合に、この場は、ますますにぎわって、楽

しい遊びの雰囲気が出てきた。「みんなで遊ぶと楽しいねえ」と、保育者がつぶやくと、四人は、にこにことする。

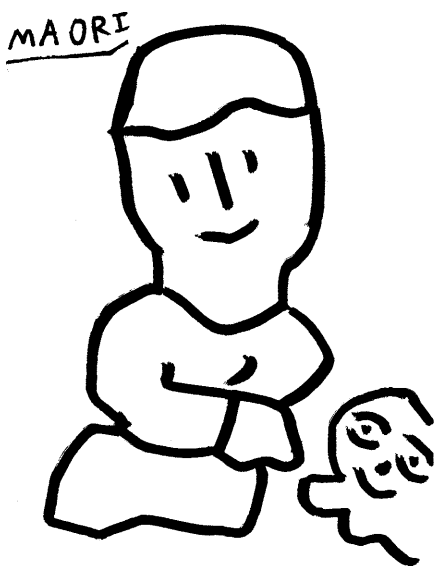
この様子が、気になるらしく、かずきは、時どき様子を  
見にやってきていたのだが、とうとう我慢できなくなったのか、「入れて！」とやってくる。ともことゆうは、先ほど断られたことも忘れたように、「どうぞ、どうぞ」とかずきも招き入れる。かずきは、あつさり入れてもらうことができ、うれしそうにしている。

その様子を見た、保育者は、「みんなで遊ぶと楽しいね」と言う。「みんなで遊ぶと、楽しいね」と言い合うように、子どもたちは、にこにここと、顔を見合わせる。

「かずきくんが入れてあげなかったときに、先生は、入れてあげるように、かずきくんに言うのかと思ったのです。でも、別の遊びになつて、それだけでもなるほどと思ったのですが、その後、かずきくんが入つてきて、ちゃんと仲良く遊べてしまつて。本当に驚きま

した。」とは、この場面を見てきた学生の感想である。

るなに、「せいやくんが、どいてって、言ってるよ」と言葉で伝えることは、簡単である。しかし、今、自分の遊びで夢中になっているんなの様子を見ると、できれば、自分の遊びに没頭する時間を大事にしたいと思うだろう。せいやに、「こつちを通るといいね」と言



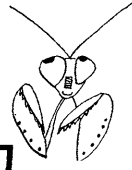
うこともできるが、それでは、せいやの遊びのイメージ、それはたとえば、こんなふう遊びたいという思いが、妨げられたように感じてしまうかもしれない。

一歳児の思いは、やわらかい。全体や周りを見て、折り合いをつけるということも、いずれ大切になることではあるが、まずは、やわらかく芽生えたイメージを大切に育てたい。保育者の子どもへの理解の深さと工夫が、一歳児の世界に、「みんなまで遊ぶ楽しさ」と「自分の世界に没頭する楽しさ」の両方をそれぞれにつくりだしている。

二歳児の例も同じである。みんなで遊ぶ楽しさは、子ども自身が、本当に楽しいと実感してこそ、その意味が確かなものになる。大人が、こうあるべきといふねらいを指し示すことは簡単だが、その意味を、子ども自身が、深く感じられる状況をつくりだすことは難しい。保育は、なかなか奥深い営みである。

(東京家政大学 家政学部 教授 児童学科 保育専攻)

## 保育の現場から



# カマキリとの出会い

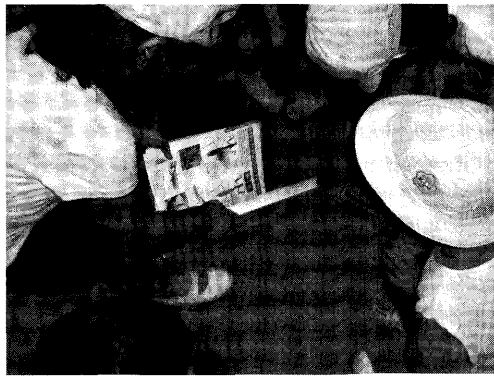
和島千佳子

子どもたちとともに生活していると、自然物やその変化との出会いは非常に魅力があり、神秘的で、子どもの心を大きく揺り動かすものだということが強く感じます。また、幼児が心を寄せたものを家庭から園に持ち込んでくることもしばしばあります。昨年度、五歳児クラスで、一人の幼児がカマキリの

卵（卵囊）を持ってきたことから始まった一連の出来事について考えてみたいと思います。

### 卵との出会い

五月の連休明けに、A児が家からカマキリの卵を持ってきました。出かけた先でお父さんが見つけて



家に持ち帰ったものを、A児はクラスの人みんなに見せたいと園に持ってきたのです。さっそく飼育ケースに入れて保育室に置いておくことにしました。

「これ何？」と興味を示す子どもたちに、今後の見通しや期待をもてるとよいと思い、『162ひきのカマキリたち』（得田之久さく、かがくのもと、福音館書店）という絵本を読み聞かせました。春に卵から生まれた百六十二匹のカマキリたちが成長の過程でどんどん減り、大きく育つたのはメス一匹のみ、そこにオスが飛んできて結婚し、しばらくしてメスは卵を産む、というあらすじのお話を、子どもたちは関心をもって聞いていました。

### カマキリ誕生、 庭に放す

しばらく変化の見られない卵でしたが、六月上旬のある朝、小さなカマキリが次々と出てきているの

をクラスの一人が発見し、すぐにみんなにその話が広まりました。朝から眠そうにして顔を伏せていたある子などは、その知らせを聞いて飛び起き、駆けつけたほどでした。

A児は数人の友達と一緒に、他クラスなど園中に生まれたてのカマキリを見せに出かけました。A児たちは、小さいクラスの友達や保育者に、A児が持ってきた卵から生まれたのだと興奮気味に話しながら全クラスを回り、職員室にも知らせに行きました。

一方、B児たちは「飼いたい、エサは何だろう」と図鑑で調べ、バッタを食べることを知り、驚いています。しかし、カマキリは生きたエサしか食べないので飼うのは難しいということも知り、どうしようかと考えている様子です。

そこへ、A児たちが保育室に戻ってきました。そしてほかの保育者から、庭のあちこちに少しずつ放しておくとなんか大きくなってまた会える、と聞いてきた

というのです。そこで、庭の茂みに数か所に分け、小さなカマキリたちを放すことにしました。

「元気でね」「また会おうね」「Aちゃんのこと忘れないでね」「Aちゃんのお父さんのこと忘れないでね」とカマキリに声をかけながら、カマキリたちの姿が見えなくなるまで子どもたちは見送ります。A児やA児のお父さんに思いをはせながらカマキリを見送る子どもたちの感性にはつとさせられました。そして、子どもたちに「先生、あのカマキリの本また読んで」と言われ、再度クラスで『162ひきのカマキリたち』を読みました。すると今回は、実際にカマキリの誕生を目の当たりにしているだけあつて、食い入るように絵本を見、よく聞いていました。それからしばらくの間は、「逃がしたカマキリはどうしたのかな」と言う声が聞かれましたが、なかなか出合えず、しだいにカマキリの話は少なくなっていました。

大きくなった

カマキリとの再会

夏の終わりのある日、園庭から「カマキリ！カマキリがいたよ！」「早く！逃げちゃうよ！」と元気な声が聞こえてきました。

夏野菜を植えたプランターの周りに大勢の子どもが集まり、ちよつとした人だかりができています。大きなカマキリは素手で捕まえるには手ごわい相手だったようで、飼育ケースに追い込んで捕まえようと考え「こっちこっち」などと声をかけ合っています。しばらくして捕まえるのに成功すると、「やったー！」「カマキリ捕まえた！」とみんな大喜びで、「ぞう組のカマキリだ！」と言っています。

その様子にも私も六月のことを思い、「Aちゃんのカマキリかもしれないね」と言うと、子どもたちは「これAちゃんのカマキリ！」と前に逃がしたこととつ

ながり、さらに大喜びです。庭のあちこちに逃がしたことを思い出し、それぞれの場所を探しに行く子どももいます。

凶鑑を持ってきて捕まえたカマキリと見比べる男児たちは、オスだといいなと思っているようで、「とぶからオス」「しかも足が長い」など、自分なりに思ったことや考えたことを言葉に表し、友達と伝え合う姿が見られます。また、やはり飼いたいという思いからエサのバッタが必要だと考え、先日の散歩で見つけたバッタを逃がさなければよかったと話し、園庭にもバッタがいるかもしれない、と探し始める子どもたちもいます。

私もカマキリを間近で見ると、立派なカマやユートモラスな三角形の顔、ギラリと光る眼に思わず見入ってしまいます。強いものへの憧れなどの気持ちでしょう。か、とくに男児がうれしそうに誇らしそうに、そしてちよっぴり怖そうに見ている気持ちもわかる



気がします。私が「本当に顔が三角だね。茶色い眼だね」と言うと、C児が「え？茶色？」とすかさずカマキリをのぞき込みます。「ほんとだ、何で？」

さっきは緑だったのに」としきりに考えています。さすが、捕まえるところからずっとカマキリをよく見ていたC児ならではの眼の色の変化の発見です。

飼うのは難しいとわかっていながらも、そばに置いておきたくてしばらくの間飼育ケースに入れていたカマキリですが、昼食前に「そろそろ逃がそうよ」と声をかけると、多くの幼児はしぶしぶ納得する中、嫌だと言いつ張るのは捕まえた張本人のD児です。私が「そう組もお昼ごはんだよ。カマキリもエサをとりたくないじゃない？逃がしてあげようよ」と話すと、D児はしばらく考えて「そうだね、そしてまたとんでいってメスと結婚してまたメスが卵産むもんね」と、絵本のことを思い出してなのか納得したようでした。

### 体験と体験がつながって 友達同士がつながって

卵からカマキリが生まれ園庭に放したこと、散歩でバッタを見つけたが逃がしたこと、大きく育ったカマキリに再び出合ったこと、などの過去と現在のそれぞれの印象的な体験が、子どもたちの中で一連の流れをもつてつながりました。さらに、絵本などからの情報も含め、カマキリを逃がすとまた結婚し卵が産まれるだろうという未来の予測もしています。それは、食物連鎖や生命の連続性といった、非常に本質的なことにかかわる大切な気づきであると思います。

子どもたちは、自分の体験や友達とのかかわりを通して感じ考える中で、自分なりの認識をしたり知識を得たりしています。そして、それらを友達や保育者と言葉で伝え合いながら、また新たな認識を深



めているのだと思います。同じ出来事に出合う中でも、それぞれの子どもたちはさまざまな感じ方をしているようです。そのような子ども同士がともに生活しながら、おもしろさや楽しさを共有し、互いの気づきや感じ方に影響を受け合って、一人ひとりの体験の幅が広がると同時に、友達同士のつながりも深まっていることを感じました。

私はこの一連の出来事から、心を揺り動かされる体験の重要性とともに、体験と体験とがつながることにより一つ一つの体験のもつ意味が深まることを学びました。私自身も、いったいいつ生まれるのだろうと毎日飼育ケースをのぞき込み（とくに週末の帰りや休み明けの朝は心配しました）、どんどん出てくる赤ちゃんカマキリの数や動きに圧倒され、生まれたての白く小さなカマキリが、みるみるうちにしっかりした硬そうな色の体に変化する様子に感動するなど、たくさんの体験をしました。

「すごい！」「おもしろそう！」「なぜ？」「どうなっているのかな？」など、自分自身の心が動かされ周囲の物事にかかわろうとすることが日々の生活の中での喜びや楽しみであり、学びの原動力になることは、保育者も子どもも同じなのだと思います。意図や計画をもちながら、ハプニングも大切に受け止めて、子どもたちとともに日々の生活をつなげ、少しずつ「新しい今」を創り出していくおもしろさを実感しています。

その後、九月いっぱいには園庭で何度かカマキリに出合うことができました。昨秋に卵は見つけることができませんでした。どこか園庭の隅に産卵していて、またこの夏、あのカマキリの子どもたちに会えるといいな、と思いつながら過ごす毎日です。

（足立区立おおやた幼保園教諭）

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(20)〉

## 「女性研究者支援」と

# 「大学内にある保育の場」についての覚書

— 京都大学を訪問して —

塩崎美穂

### 訪問目的

二〇〇七年十月、お茶の水女子大学幼保プロジェクトでは京都大学(以下京大)を視察訪問しました。

訪問目的の一つには、「女性研究者の包括的支援」を掲げる「京都大学モデル」がどのようなものであるのか、具体的な事業内容や、実際運営上の課題などを知りたい、ということがありました。というのも、京大のそれが、お茶の水女子大学(以下お茶大)のような女子大学とは異なる「女性」研究者支援であろうことが予想されたためです。共学大学に

おける男女共同参画的な課題を確認することで、私たち女子大学の研究者支援のもつ特殊性が浮き彫りになり、われわれの課題もまた明確になるのではないかと考えました。

もう一つの訪問目的として、京大の「学内保育所」(Ⅱ大学内の保育の場)について知っておきたい、ということがありました。「大学内にある保育の場」を実践の拠り所とする幼保プロジェクトとしては、京大における五十年近い保育園保育の歴史から多くを学びたいと思っています。

つまり、京大とお茶大には、誕生の背景が歴史的

に異なる大学内の保育の場があるわけです。保育史の流れから見れば、「ポストの数ほど保育所を」という一九六〇年代の保育所設立運動と共に一九六五年に設立されたのが京大の「朱い実保育園」であり、一九九〇年以降の少子化問題の顕在化や保育所利用の通常化の中、二〇〇二年に開設されたのがお茶大の「いずみナーサリー」ということになります<sup>2)</sup>。

## 乳児保育と幼児保育

またお茶大の学内には、長い歴史をもつ附属幼稚園という保育の場もあります。幼稚園の幼児保育研究は、実践者を中心に保育者養成課程の大学教員を巻き込みながら行われてきました。そして今でも、幼児保育実践者は保育研究をする人であり続けています。ところが、学内にできた乳児保育の場では、保育実践者と大学の研究者が協同研究をしようとす

際、乳児保育の成立背景にある「女性研究者支援」という要素によって、従来の保育実践者を中心とし

た保育研究のあり方が、十分に機能し得ない状況を抱えているように思われます。

乳児保育をするということは、幼稚園のような四時間の保育時間ではなくなることを意味します。保護者の就労や学習時間をしっかりと保障することが、子どもの育ちを支える保育になるからです。保育時間が長くなり、保育実践者に十分な研究の時間を確保する工夫を考える必要が生じています。子どもの生活を、丸ごと支える乳児保育の実践を始めた今、お茶大の保育研究としてある幼保プロジェクトでは、保育実践者の保育研究について改めて考える時期にきているのかもしれない。

## 保育実践の内にある学問

保育実践者の保育研究について考えるとき、戦前からの保育園保育実践者として著名な鈴木とく先生の次のような言葉を思い出します。

一見保育は、情にみちていれば足りるようですが、その奥にかくされた学問の智がどんなにか保育をふくめますかをずっと思ってきました。／幼い人たちの何気ないしぐさを深くみてとる瞬時の感得はその奥にかくされた学問の苦勞がなければ、その事を生かすことができないのではないかと思います<sup>3</sup>。

とく先生の協同研究者であった教育心理学者の山下俊郎先生は、「本当に子どもを愛するものは学問を愛す」と書き記した本をとく先生に渡されたそうです。

保育園なのか、幼稚園なのかということではなく、保育実践者が学問を必要とするこの意味をとらえ、保育の場が大学にあることの意義を、改めて見いだしたいところです。

### 視察報告を若手から

さて、今回の視察訪問には、東京学芸大学院生(当時)の湯浅さんに同行してもらいました。それは、

湯浅さんが愛育養護学校に通う若手の保育実践者でもあり、私たち幼保プロジェクトの「総合的保育者」養成構想に直結する課題に、若手からの新たな視点を提起してくれるだろうと考えたからです。実際、若手保育者がどのような保育実践や保育研究に学びたいと考えているのか、今の保育実践に資する学びとはどういうものなのか、保育者にとっておもしろい研究領域とは何なのかなど、湯浅報告から見えてくることは少なくありません。

保育研究をする院生であり、かつ若手保育者でもある人の視点から、京都の視察報告をします。

(お茶の水女子大学 幼保プロジェクト 専任講師)

#### 註

- 1 詳細については、「平成一八年京都大学女性研究者支援センター報告書」およびホームページ <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp> を参照した。
- 2 朱い実保育園については、朱い実保育園職員会編『朱い実の子どもたち』（ミネルヴァ書房 一九八五）を参照。
- 3 鈴木とく『保育は人間学よ』（小学館 二〇〇〇）二〇四・二〇五頁

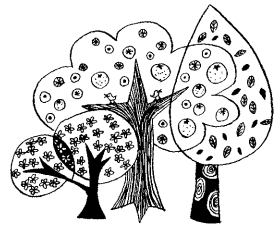
# 視察訪問からの学び

## 京都大学女性研究者支援センター

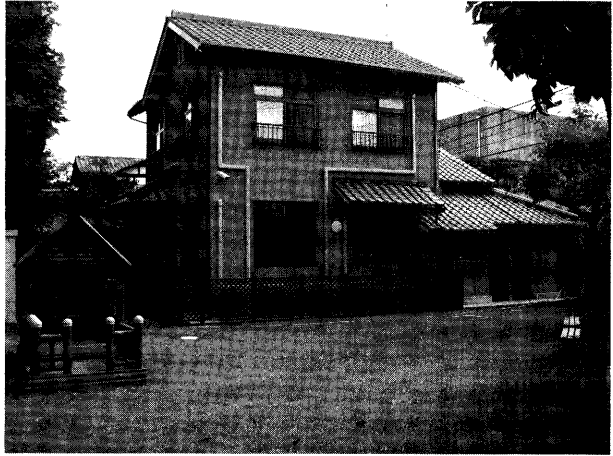
二〇〇七年秋、文部科学省科学技術振興調整費（科振費）「女性研究者支援モデル育成」事業の資金を基金として設立された、京大の女性研究者支援センターを訪問しました。二〇〇六年にセンターが設立された経緯や現在の活動、今後の展望などについて、登谷美穂子特任教授（理学博士）にお話をうかがいました。

京大の常勤の教授・准教授に占める女性研究者の割合は七%前後であり、全国の大学平均（十六%）と比べて大変低いため、これを機会に、女性研究者

## 湯浅周子



ネットワークの構築を進めているとのことでした。学内に別に組織されている男女共同参画委員会ではなく、この女性研究者支援センターが中核になり、支援事業が二〇〇七年度からスタートしています。共学大学においては、男女共同参画という男性と女性が共同で仕事をしていくことや、男女の社会的な平等を呼びかける活動機関からではなく、「女性研究者」にターゲットを絞って活動するこうしたセンターが必要であることがわかりました。お茶大では、女性研究者率が役員と教授・准教授・講師ともに四十%と非常に高く、やはり共学の京大とは事情が違うのだと思います。女子大に比べると、女性研究者への



▲日本家屋の趣を残す「京都大学女性研究者支援センター」

支援はあつて当たり前のように感じていましたが、それはある意味特別な配慮なのだと気づきました。

センターは関東大震災の直後の建築で、耐震強度抜群だという、医学部敷地内の築八十年の官舎を改築した木造の建物でした。外壁は黄色に塗り替えら

れており、遠くからでもよく見えます。表庭は植栽や石がそのまま残されており、落ち着いた雰囲気でした。裏庭には芝生の広場が造られ、子どもが遊べる空間になっていました。建物内部は、木がふんだんに使われた内装を活かした改装にとどめてあつて、そのことが新築のものにはない歴史を感じさせます。一階は自主保育室、二階は事務室・会議室として利用できるようになっており、支援センターには、会計やその他の専門ごとに分かれた三名のパートタイム職員の方と、センター長の登谷特任教授が常駐していました。

### ○歳児保育や学童保育事業

今回、登谷先生からは、「育児・介護支援」事業について重点的にお話をうかがいました。当初、学童保育のニーズがあるのではないかという予想の元につくられたという女性支援センターは、たしかに学童保育の場としても使えるような空間でした。しか

し、実際のところ学童保育は、地域でという希望が多く、意外に需要が低いことに設立後に気づいたそうです。育児に関するアンケートを取ったところ、年度内に生まれた〇歳児の子どもを預けられる場所がなくて困っている人が多かったことから、年度の後半に復帰したい研究者への支援の必要性が明らかになり、それに応える体制をつくり始めているところでした。学内に二つの保育園があっても、途中入所は難しいということなのだと思いました。

具体的には、二〇〇七年十二月から〇歳児の子ども数名を受け入れる準備をしており、女性支援センターが、毎年十二月から翌年四月までの期間限定で一時保育の場として利用されるようになることでした。派遣保育士を雇う体制で仕組みを整え、費用面では、利用者負担分で足りない額を京大が補助する仕組みが確立しているそうです。

当初から予定されていた学童保育は、大学関係者の小学校一〜三年生の子どもを対象に、昨年夏休み

に期間限定で「夏休み！ キッズサイエンススクール」として開催されました。日替わりで大学所属の研究者が自らの研究分野について子どもたちと話し、一緒に実験してみる時間が組み込まれている活動でした。ただし、お弁当やおやつ、遊びの時間といった子どもの生活面についての配慮は、派遣の保育士に任せられていたそうです。

お話をうかがいながら、改めて「女性研究者支援」に徹した計画なのだということに強く思い至りました。そこには、教員養成を主目的とする師範学校系列の大学ではないからこそその発想の自由さがあり、理念の大枠から物事を語るができる自由さがあると思えました。現実に合わせた対処の中で、よりよい方向を目指していく強力な推進力があるということに、「京大モデル」の強さを感じました。

### 朱い実保育園

登谷先生は、ご自身もかつて朱い実保育園に通い

ながら子育てをし、研究を続けてこられた先生です。朱い実保育園は「今もなかなか入園できない、とて入園希望者が多い保育園」だと先生はおっしゃっていました。京大内にあっても、認可保育園であるため「京大所屬者」の入園優先枠は限定的なものになるとのことでした。認可園では、大学関係者の利用したい年度途中入園や夜間保育の実施も難しいでしょう。認可保育園になることは保育園運営を安定させ、子どもにとってよりよい保育環境を保障するものの、それは大学関係者にとって利用し易い保育の場ではなくなることなかもしれません。

登谷先生のご紹介もあって、朱い実保育園を訪問する機会にも恵まれました。ここでは射場博己園長のお話をうかがい、朱い実保育園が京大の教育学や心理学研究者とも一緒に保育をつくってきたという自負を感じました。特に印象的だったのは、連絡帳ではなく、クラスの子どもの全員の様子がわかる、紙一枚の連絡用紙（個人情報保護よりも、子どもの

育ち“をみんなで考えることのできる工夫）方式を採っていたことです。送りにきた保護者が自分の子どもの欄に家での様子を書き、保育者もその日の子どもの様子をその一枚のみんなの紙に書いているのです。

時代が個人情報保護に流れる中で、「もっと大切なことがある」と言い切る射場園長の姿に、体制に流されない信念を感じました。課題のある保護者もみんなの中で育っていく、閉じた関係の中では保育はできていかないのだということを、経験的にも論理的にも語る姿に、はっとしました。

冷凍母乳を飲む赤ちゃん、授乳に来るお母さんを待つ赤ちゃんなど、〇歳のクラスでは二十人の子どもたちが生き生きと過ごしていました。私は、養護学校で非常勤講師をしています、今回このような機会を得て、ほかの保育現場での子どもたちの姿を見ることは、自らの保育観を問い直す機会となりました。



## 研究会への参加

京大訪問の合間に、比較教育史研究会に参加しました。保育現場関係の研究会に普段参加している私には、「十八世紀のイギリスを中心にやっています」といった参加者同士の自己紹介が新鮮で、自分が「現代の日本」という限定された区分の研究をしていることに思いました。研究会の中でも「近代研究だけでは近代（つまり自分自身）を相対化できないのではないか」という近世研究からの指摘があり、考えさせられました。現代についての研究をしている人間しか周囲にいない環境にいたので、現代について考えることと現代を対象に研究することとの関係について考える機会がこれまでなかったのです。現代という時間を、社会や時代といったより大きな流れから捉えていく視点の必要性を再認識しました。また、専門分野の異なる研究者と一対一で話した際、自分の研究について説明するということの難し

さを感じました。ちょうど修士論文で幼稚園教育実習におけるメンタリングについて取り組んでいた時期だったので、教育史研究をご専門とされる方々に新しい角度からの質問を数多くいただきましたが、どうも説得力をもって自分なりの答えを説明することができないのです。普段、研究者ではない人（現場の保育者や保護者など）に、自分の研究について話すことの難しさを感じることは多くありますが、それとはまた別な種類の難しさがあるのだと再認識しました。共通の理解や世界観などに基づいている人の中になると、説明できているような気になっても、なかなか実際にはそうはいかないことを痛感した出来事でした。

関西との言葉の違いも感じつつ、異文化・異分野の方々との交流にこれからはますます積極的にならねばと思いました。

（お茶の水女子大学 幼保プロジェクト  
アカデミックアシスタント）

## 編集後記

8月は死者のことを考える月である。先日身近な人が亡くなり、通夜やお葬式に子どもも参列した。このようなとき、親や親戚がいつもと違う緊張と厳しさをもって忙しく立ち回っているのを、子どもはまじめに見ているものだった。

作法など教えてやる時間がなく、いつの間にかお焼香の列に入っていった小中学生のわが子の様子を見守っていたら、戸惑いは多少ありながらも、列の流れにうまくとけ込みつつ心のこもった所作で手を合わせていた。帰宅してお位牌をお守りする日々の中、ある朝私が「もうお水かえた？」と言ったら、「金魚じゃないんだから」と逆に諭された。死者の教育力に感じ入る。生きていることを特別に、しかし謙虚に受け入れる気持ちを育むのだろうか。(H)

## 幼児の教育 第107巻 第8号

平成20年 8月 1日発行  
編集兼発行人 浜口順子  
編集部 永山 綾  
発行所 日本幼稚園協会  
〒112-8610  
東京都文京区大塚2-1-1  
お茶の水女子大学附属幼稚園内  
発売所 株式会社 フレーベル館  
☎03-5395-6604 (編集)  
振替 00190-2-19640  
印刷所 図書印刷株式会社  
定価 550円(本体524円)  
©日本幼稚園協会 2008 Printed in Japan

表紙絵 佐藤奈々  
扉カット 佐藤奈々  
扉題字 津守 眞  
カット 斎藤明子  
編集委員 伊集院理子  
上坂元絵里

ご購入のお問い合わせは、  
フレーベル館までお願いします。  
☎03-5395-6613 (営業)

## 次号予告

### 〈特集〉『幼児の教育』

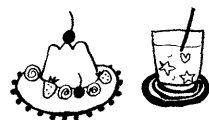
### ネット公開をめぐる

本田和子・豊田一秀・向山陽子・首藤美香子・加島大輔

・省察的実践者としての保育者

三輪建二

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。



## おたより大募集

ご意見ご感想をお寄せ下さい。今月号の中で、特によかったもの、取りあげてほしい内容などもお知らせください。本誌へのご投稿もお待ちしております。

はがき：〒113-8611 東京都文京区本駒込6-14-9 (株) フレーベル館

「幼児の教育」編集部

Fax : 03-5395-6622 E-mail : youjimap@yahooc.co.jp

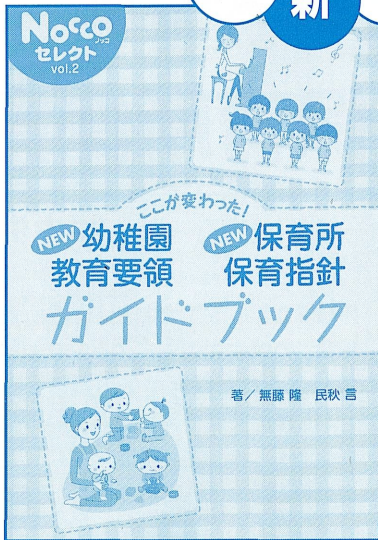
最新刊

# NoSCO セレクト vol.2

NEW ここが変わった!

## 幼稚園教育要領・ 保育所保育指針 ガイドブック

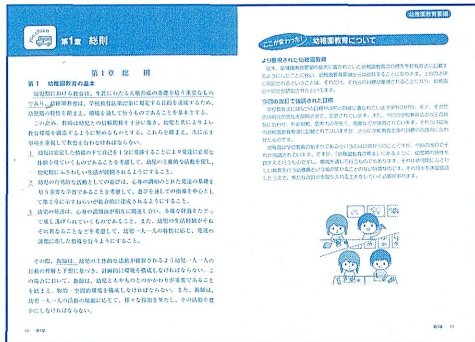
無藤隆・民秋言／著



21×15cm/128頁 定価525円 (税込)  
106-02

平成20年の改訂に合わせて「何が  
変わり、どのように保育に活かせば  
よいのか」をわかりやすく解説。幼  
稚園教育要領と保育所保育指針の条  
文を全文掲載。

保育界の動向を知り、これからの保  
育を考えるための必読の本。



好評発売中!

## Noccoセレクト vol.1

犬飼聖二・高崎温美の  
うたおう!つくろう!  
遊びのアイデア (CDつき)

犬飼聖二・高崎温美／著



26×21cm/80頁+CD1枚 定価2,415円 (税込)  
106-01

キンダーブックの  
フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

# 保育所保育指針解説書

厚生労働省／編

平成20年に改定された『保育所保育指針』の厚生労働省による公式解説書。告示化された保育指針の趣旨が理解され、また各保育所がそれぞれの特色を生かし、創意工夫を図っていくための助けとなるように作成された1冊。

保育所保育指針	
目次	
第1章 総論	214
1 趣旨	214
2 指針の位置	215
3 関係法令	219
4 指針の目的と趣旨	220
第2章 子どもの発達	222
1 発達段階と発達過程	222
2 発達過程	223
第3章 保育の目標	226
1 保育の目標	226
2 保育の目標上の留意事項	233
第4章 保育の環境と設備	236
1 保育の環境	236
2 保育の環境に関する留意事項	239
第5章 職員と職員等	242
1 子どもと職員との関係	242
2 職員間の関係	243
3 職員と保護者との関係	244
第6章 関係機関との連携	245
1 関係機関との連携	245
2 関係機関との連携に関する留意事項	246
第7章 関係機関との連携	247
1 関係機関との連携	247
2 関係機関との連携に関する留意事項	248
第8章 関係機関との連携	249
1 関係機関との連携	249
2 関係機関との連携に関する留意事項	250
第9章 関係機関との連携	251
1 関係機関との連携	251
2 関係機関との連携に関する留意事項	252
第10章 関係機関との連携	253
1 関係機関との連携	253
2 関係機関との連携に関する留意事項	254
第11章 関係機関との連携	255
1 関係機関との連携	255
2 関係機関との連携に関する留意事項	256
第12章 関係機関との連携	257
1 関係機関との連携	257
2 関係機関との連携に関する留意事項	258
第13章 関係機関との連携	259
1 関係機関との連携	259
2 関係機関との連携に関する留意事項	260
第14章 関係機関との連携	261
1 関係機関との連携	261
2 関係機関との連携に関する留意事項	262
第15章 関係機関との連携	263
1 関係機関との連携	263
2 関係機関との連携に関する留意事項	264



353-10

## 巻末に「保育所保育指針条文」掲載

### 目次

- 保育所保育指針解説

### 付録

- 保育所保育指針
- 保育所保育指針等の施行等について
- 保育所保育指針の施行に際しての留意事項について

保育士をはじめ職員の方、  
保育関係者さらに保護者  
必読の本

21×15cm / 264頁  
定価200円(税込)

キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。